

芸豪烈伝その15

みはら さちこ  
三原佐知子

「心が笑しくないと浪曲は語れない」

写真・森 幸一ほか 文・おさだ権十



迫力満点の大声、緩急自在のタンカ。失意のドラマや成功のエピソードが彼女の口から語られると、場内に感動と涙の渦が大きく広がっていく。人気、実力ともにトップクラス。関西の俊英・三原佐知子に浪曲の現在と未来を聞いた。

みはら さちこ 三重県熊野市出身。本名・鳥越幸子。叔父の浪曲師・近江勝に勧められ昭和29年、15歳でデビュー。近江五十鈴という名で『出世の草鞋(わらじ)』を語った。「声は鍛えましたよ。山、海、谷に向かって稽古しました」。昭和34年、小松千鶴と改名。三原佐知子の名前は昭和53年から。趣味は洋裁。「自然食品を食べて健康を心がけています」

芸豪は関東だけにいるのではない。関西、中京、九州と全国に分散して、土地土地に松杉うえて浪曲の普及・宣伝に精を出している芸豪は少なくない。三原佐知子は関西、関東の垣根を越えた、押しも押されぬ看板だ。「芸は心がきれいな人でないとダメだと考えています」

生涯を、果てし無い芸道修行として日々、研鑽している。好きな言葉は、誠実と真実一路。血液型はO。性格の自己分析は、「O型は親分肌です。私も気がつよそうに見えて、実は情にもろく涙もろいんです。「ああ残留孤児」という演題を語るときは私自身が残留孤児になった気持ちで涙が出てきます。

それと根っから呑気なんですわ。くやしいことや腹がたつことがあって、なんとか考えなあかんとフトンに入っても30秒も経たないうちに寝てしまふんですよ。あははははは」

三原佐知子はファンを大切にすることを心掛けている。25年来の熱烈なファンが数十名いることが、彼女が誠実で真実一路に生きている証明だろう。

昭和46年、バックでギター伴奏を務めていた夫が病死。当時2歳と4歳の男の子の手を握りしめ悲嘆にくれたが、「私がやらないでどうすると、ふんばってきました」

浪曲とこの私の声で、子供ふたりを





「私がいうのもなんですけど、いまの日本は正しい人を正しいと認めない風潮がありますね。島国根性でいってはいかななあと思いますよ」

育ててきました。苦勞はしましたが、それは芸のこやしになっていきますよ」  
子育てについてのエピソードをひとつ話してもらった。  
「いまは二人とも成人しましたが、次男が中学生の頃に「うちには、おかあちゃんがない」と、いうんです。なにいうてんねん、ここにおるやると私がいうと「いや、おかあちゃんはオヤジヤ」と息子がいうんです。知らず知らず、男親のようになっていたんですね。複雑な心境になりましたよ」

二人の子供も一本立ちし、いまは浪曲に全力を注げるようになった。

「寝ても覚めても浪曲のことばかり考えています。浪曲は、やればやるほど奥が深く難しく、やりがいがあります」  
どう工夫すればお客さんが魅了できるか。昨年12月、大阪は国立文楽劇場で「お梶の恋（藤十郎の恋）」（菊池寛・

原作、飯山栄浄・脚色、西脇功・音楽）という演題を「一人芝居」で演じた。

「かつらをかぶり、三味線と効果音を使いテールプルかけは外しました。お梶の声は正面に向かって出して、藤十郎や他の人の声は横に言って、お梶として舞台をつとめたのです。振り付けは三寿雅ノ丞という方でした。お客さまの反応が良く、成功だと思いますよ」

先人が試みていない新しいやり方に挑戦する姿勢が素晴らしい。芸人が小さく固まって保守的になってはならないという見本だ。

「大阪でも浪曲の真髄をわかってくれるお客さんが少なくなっています。浪曲をわかりやすくし面白くして、変わったことをして、お客さんをひっぱってきたいですねえ」

三原佐知子の浪曲は定評があるが、歌のうまさも拔群だ。2月3日にキングレコードから「三原佐知子の世界」というカセットアルバムが出る。その中に「お梶（藤十郎の恋）」が収録されている。お梶の舞台姿が目の前に現れるような、いい出来だ。彼女は「浪曲炭鉱節」という歌もリリースしている。この曲の元歌は芙蓉軒麗花だが三原佐知子は、すっかり自分のものにしていく。曲中の「てけれつつのパッパ」は幸せを祈るメッセージ。一聴を勧める。さて、浪曲の未来はどうでしょうか。「浪曲はまだまだ可能性はあります



この和服姿で「お梶」を演じた。「カラオケ人口は浪曲のお客さんの予備軍だと思います。とにかく、1回は私の浪曲を聞いてもらいたいですよ」

よ。京山福太郎さんのような実力がある人気者の5人も駆け上がってくれば盛り返せると思いますよ」

大胆にして細心、豪快さと優美さが漂う舞台。ネタも「命はてるまで」「三味線やくざ」「母恋あいや節」「じゃんがら流転」「鶴八鶴次郎」など題材も多岐にわたっている。この冬のさなか、三原佐知子の浪曲を聞くとも心も暖かくなりそうだ。

おしまいに恋愛について訊ねてみた。「恋愛、おとこ？ いやあ、面倒くさいわ。あら、こんなこというから私はもてへんのやね」。恋人は浪曲という、平凡だが含蓄のある返事だった。

三原佐知子が表現する愛、別れ、悲しみ、喜びは一味も二味も違つて心に響いてくる。  
今年三原佐知子とその底力を再確認させる年になろう。

**浪曲**…これほどすばらしい芸は他にはないと  
思います。

15  
—  
52

浪曲家の皆さん…頑張つて下さい。  
多くのファンを楽しませて下さい。

葛飾区・坂本豊吉